

パラグアイに移住して68年になる三井波夫さん(左)の自宅で、同国の国民的な飲み物テレレを回し飲む北澤さん(右)、千葉玄治郎さん(左から2人目)、金沢ファンさん



FIELD SKETCH

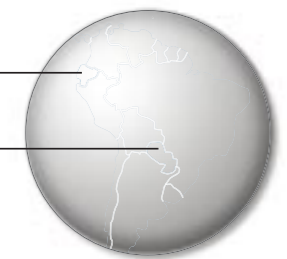
北澤さん、サッカー大陸南米での挑戦

JICAオフィシャルサポーターで、元サッカー日本代表の北澤豪さんが2月1～12日、南米のパラグアイ、エクアドルを訪問し、JICA事業の視察とともにサッカー教室を開催した。両国はサッカーの盛んな南米の代表として「2006FIFAワールドカップドイツ大会(W杯)」に出場する。「今回の機会は、自分のサッカーがどこまで通じるか、挑戦でもありました」と言う北澤さんの現地での奮闘の様子を報告する。

文・写真 = 池田 有美子 (JICA広報室)
text and photos by Ikeda Yumiko

エクアドル
ECUADOR

パラグアイ
PARAGUAY



日本人移住者との交流

日本とは地球の反対側に位置する南米大陸。北澤さんが成田からアメリカ・ニューヨーク、ブラジル・サンパウロを経て、パラグアイの首都アスンシオンに到着したとき、には約26時間が経過していた。南米は今、夏。パラグアイの日中は45度近くまで気温が上がり、湿度も日本の夏のように高い。そんな環境の中、アスンシオン日本人学校とともに、ラ・コルメナ移住地(人口約5000人、そのうち日系人は約400人)でサッカー教室が行われた。ラ・コルメナという名前は、スペイン語で「ミツバチの

巣」を意味する。勤勉な日本人を表したものだという。今年には日本人のパラグアイ移住70周年。パラグアイには6カ所の移住地があり、その多くが戦後につくられた。首都から約130キロ離れたラ・コルメナ移住地は最も古い移住地で、まさに70年の歴史を持つ。果樹栽培が盛んで、ブドウやマングーの産地として知られている。サッカー教室の前に、北澤さんは8年前に移住した三井波夫さん(84)の自宅を訪問した。北澤さんにとって、移住は身近な存在だった。1990年にサンパウロに半年間サッカー留学をしたのですが、そこで2世、3世の友達がたくさんできました。

伯母もブラジルに移住しています」と北澤さん。三井さんの自宅の庭で、ラ・コルメナパラグアイ日本文化協会会長の千葉玄治郎さん、コルメナ・アスンセーナ農協組合長の金沢フアンさんと、パラグアイの国民的な飲み物テレレを回し飲む。移住当時の苦労話からW杯まで、さまざまな話題で話が弾んだ。



これから始める練習について説明をする北澤さん(パラグアイ)



「僕たち、こんなに強いんだよ。」これまでの大会でもらったトロフィーを北澤さんに見せる地元の少年サッカーチームの子どもたち(パラグアイ)



北澤さんも子どもと一緒に準備体操。「さすが高地、空気が薄いなあ(エクアドル)」

北澤さんの「意外な」一面

北澤さんはパラグアイ、エクアドルで、それぞれ技術協力プロジェクトを視察した。

パラグアイの「南部看護・助産継続教育強化プロジェクト」は、看護師・助産師の質の向上を目指すもの。北澤さんが訪問したときは、ファシリテーターである現地の看護師・助産師によるマネキンを使ったリプロダクティブヘルスの研修が行われていた。マネキンとはいえ分娩の介助の研修だけでなく、北澤さんに同行した男性たちの中には顔を赤らめたりする人も。そんな様子を見て、「大丈夫ですか?」と小川正子専門家が声をかけると、北澤さんはこう一言。「もちろん! 長男、次男、長女の出産に立ち会っていますから。この研修の成果で安全なお産が広がってほしいですね。」

エクアドルで視察した「職業訓練改善プロジェクト」は、工業分野の人材育成強化のため、職業訓練校へ実習教材や機材整備などの協力を行っている。職業訓練校で電気・電子、機械加工などの機材を見ながら、北澤さんは積極的に専門家たちに質問をした。「読売クラブ(現東京ヴェルディ1969)の前に、本田技研工業のサッカー部にいたので、新入社員のところはここにあるような機材を使った実習も受けました。懐かしいなあ」と感慨深い表情も見せた。



現地の看護師・助産師によるリプロダクティブヘルスの研修を視察(パラグアイ)



野澤征夫専門家からスライス盤について説明を受ける北澤さん(エクアドル)



サッカー教室の練習内容をメモ書きしたノートを見せる少年サッカーチームのコーチ(エクアドル)

サッカー教室の練習内容をメモ書きしたノートを見せる少年サッカーチームのコーチ(エクアドル)

「この教室でもコーンを使ってドリブル練習などが行われた。折を見て、北澤さんは一人一人の子どもにアドバイスをする。グラウンドの外では、メモを取る少年サッカーチームのコーチたちの姿があった。その一人、エクアドル・バステイダスさんはこう話す。

「標高の高いキトは高山病になる人も多く、ここでのサッカーの国際試合は外国人にはデメリットです。そんな環境を生かして、今回2度目のW杯出場が決まったようなもので、実はわが国のサッカーの基本は十分ではないと思っています。W杯に3回連続して出場する日本のすばらしさは、北澤さんの練習を通して実感しました。ぜひ今後も日本にはサッカーの指導者研修などの協力をしてもらいたいですね。」

「南米の多様な自然環境などを知ることができました。また、サッカー大陸ともいえる南米で、自分のサッカーがどこまで通じるか、挑戦でもありました」と北澤さんは振り返る。そして、「手応えは十分でしたか?」の問いに力強くうなずいた。

「この教室でもコーンを使ってドリブル練習などが行われた。折を見て、北澤さんは一人一人の子どもにアドバイスをする。グラウンドの外では、メモを取る少年サッカーチームのコーチたちの姿があった。その一人、エクアドル・バステイダスさんはこう話す。

「標高の高いキトは高山病になる人も多く、ここでのサッカーの国際試合は外国人にはデメリットです。そんな環境を生かして、今回2度目のW杯出場が決まったようなもので、実はわが国のサッカーの基本は十分ではないと思っています。W杯に3回連続して出場する日本のすばらしさは、北澤さんの練習を通して実感しました。ぜひ今後も日本にはサッカーの指導者研修などの協力をしてもらいたいですね。」

「この教室でもコーンを使ってドリブル練習などが行われた。折を見て、北澤さんは一人一人の子どもにアドバイスをする。グラウンドの外では、メモを取る少年サッカーチームのコーチたちの姿があった。その一人、エクアドル・バステイダスさんはこう話す。

「標高の高いキトは高山病になる人も多く、ここでのサッカーの国際試合は外国人にはデメリットです。そんな環境を生かして、今回2度目のW杯出場が決まったようなもので、実はわが国のサッカーの基本は十分ではないと思っています。W杯に3回連続して出場する日本のすばらしさは、北澤さんの練習を通して実感しました。ぜひ今後も日本にはサッカーの指導者研修などの協力をしてもらいたいですね。」

そんな言葉を反映するかのようになり、サッカー教室が終わった後の北澤さんは、コーチたちに囲まれてサッカーの指導に関する質問攻めにあっていた。

2004年からオフィシャルサポーターになった北澤さんは、これまでにアフリカ・ザンビア、中東・シリアでJICA事業の視察とともに、現地の子どもたちを対象にサッカー教室を行ってきた。だが今回のように、1度で2カ国で視察・活動したのは初めてだ。「南米の多様な自然環境などを知ることができました。また、サッカー大陸ともいえる南米で、自分のサッカーがどこまで通じるか、挑戦でもありました」と北澤さんは振り返る。そして、「手応えは十分でしたか?」の問いに力強くうなずいた。



サッカー教室の後、コーチたちからサッカーの指導に関する質問を受ける北澤さん(エクアドル)



まずはコーンを回る練習から(パラグアイ)

サッカーは南米の人々の誇り

サッカー教室ではちょっとしたハプニングがあった。北澤さんは、日系社会青年ボランティアが教えるラ・コルメナ日本語学校の子どもたちとともに、地元の少年サッカーチームのメンバーも指導した。少年チームのコーチ、ロベルト・ゴンサロさんはアルゼンチン人の青年で、2年前から祖父母が暮らすこの移住地で暮らしている。このコーチが「北澤さんにお任せする」と言いながらも、子どもたちにサッカーの試合形式の練習をさせ、グラウンドをしばらく空けなかったのだ。

その後、北澤さんの指導で、子どもたちは二手に分かれて、一人がボールをけり、もう

一人が受けたボールをドリブルしながらコーンを回る練習をした。北澤さんは通訳を交えて、熱心に指導する。そんな様子を遠巻きに見ていたコーチだが、最後は自身も練習に加わるようになっていた。

この練習を終えて、ゴンサロさんはこう満腹に話してくれた。「南米の人たちにとってもサッカーは誇り。実は、外国人からサッカーを教わるなんて考えられない、と思っていたのですが、北澤さんの指導は勉強になりました。これ続けることで、選手たちは正確にボールを出し、パスをつなげるのがうまくなるでしょう。」

もちろん子どもたちも充実したひとときを楽しんでくれたのは言うまでもない。「これまでやったことのない練習をして、いろいろ学ぶことができた」(フランコ・ドウルセ・マリアさん、13歳)、「北澤さんに『上手だな』とほめてもらってうれしかった」(林弘美さん、12歳)、「北澤さんと一緒にサッカーができて楽しかった」(ベニテス・ルイス・ヒルベルトさん、14歳) 子どもたちはこう口々に喜びを語った。北澤さんは地元の人たちの鳴り止まない拍手に包まれて会場を後にした。

高地でのサッカー教室



エクアドルのサンアントニオスタジアムで行われたサッカー教室に参加した子どもたちと北澤さん

し、丸1日かけてエクアドルへ移動する。この国では、標高2800メートルの首都キト近郊でサッカー教室が行われた。エクアドルはスペイン語で「赤道」の意味を持ち、赤道が通る国の一つだ。会場となった赤道記念碑の近くのサンアントニオスタジアムには、地元の複数の少年サッカーチームの子どもたちが集まった。

